

琉球大学学術リポジトリ

豚の繁殖率を高めるために

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20933

豚の繁殖率を高めるために

最近キビー辺倒の農業経営に批判が加えられ、又豚価の好値とあいまって養豚熱が次第に高まってまいりました。ご承知のように豚は多胎動物に属し、種付までに生後8～10ヶ月であり、その後は1年に2回生産するので、その増加率は他の家畜に例をみないものであります。

ところでこのような天性をもっている豚もややもすると、その能力を発揮せしめ得ないことがありますので、ここに参考となるべきことから述べてみたいと思います。

1、産仔数に関係あることから

(1) 品種並びに系統

産仔数は遺伝的に支配されるもので、豚の品種によってもちがいますが、同一品種でもその系統によって相当ひらきがあるものです。従って繁殖用子豚を選ぶ場合は多産系のもを選択する必要があります。

沖縄の豚の主なる品種はチエスターホワイト、ランプシヤ、パークシヤそれにランドレースと実に優良種のみで占られています。ところで肉用子豚生産にはこれらの純粋種をそのまま利用することは極めて少く、殆んどがこれらの品種を交雑した雑種繁殖が行われています。

日本においても例を神奈川県にとりますとランドレースの導入によって一代雑種の利用が著しく普及し肉用子豚は殆んど雑種になっているといわれています。最も多い品種と交配の組合せはヨークシヤ雌豚にランドレース雄豚を交配した一代雑種利用であり、最近ランドレースの普及により、ランドレースの雌にヨークシヤの雄を交配する逆交配もみられます。またこの一代雑種雌豚にパークシヤを交配する三元雑種利

用もかなり行われているようです。一般にヨークシヤ×ランドレースの一代雑種は、肉の色がうすく、肉のしまりがやや悪いという傾向があり、その是正のために有色品種のパークシヤを交配して、肉質を改善しようというねらいもあり、ほぼその目的は達しているようです。また一代雑種の雌に、両親の何れかの品種を交配する戻し交配も行われています。このように交配は雑多で、三元雑種はその有利性は確認されながら、最もよい交配の順序は未だ決っていないとのことです。

沖縄も数品種が飼養されているので、この種の組合せ試験をするには好都合であり、将来是非確定したいものです。

(2) 飼育管理の適否

繁殖豚の育成や繁殖供用豚の飼育には蛋白質飼料の適量を与えることが大切です。蛋白質が不足して澱粉質が多すぎる場合は脂肪豚になりやすく、繁殖障害の誘因になります。一腹の仔豚でも蛋白質を多く与えた方の仔豚は低蛋白の子豚に比べて胴伸びがよいです。またたえず雑草や根菜類等の緑餌と食塩、カルシウムの給与をなすことです。その外運動も欠くことの出来ない要素ですので、豚舎には運動場を設けたいものです。

(3) 排卵数と胎児数

豚の排卵数は8～21個で、平均14個です。排卵数は発情周期を重ねるごとに増加します。また産次ごとにみますと4産目が最大となります。

排卵数と胎児数の関係は平均すると排卵数の7割が胎児になりますが、個々の例についてみますと、諸条件が最も良好な場合は排卵数に対し100%の場合が

あり、最低は26%という例もあります。従って産仔数の増加をはかるためには常に豚を最良の状態におくことが肝要だと思います。

(4) 死産 (黒仔)

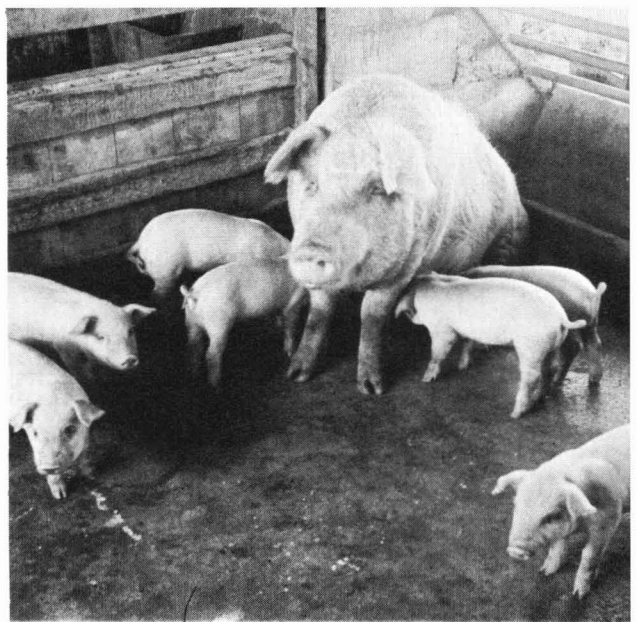
豚は日本脳炎にかかっても認むべき症状を示さないのが普通です。然し妊豚がかかると死産するものが多く、胎児の発育程度が極めて不同で、大小さまざまな胎児が存在し、小さい胎児は暗褐色のミイラ様になります。日本脳炎は前年秋生れの初産豚に多発し、夏から秋にかけての分娩のものに発しやすい。これが予防には5月頃までに妊娠前または妊娠初期のものに予防注射を行うことです。

2、繁殖率を高める方策

前に述べましたように繁殖用子豚は多産系統を選び合理的飼養管理の下に順調な発育をなさしめ、繁殖供用は生後8～10ヶ月、体重120kg程度に達した時に用うべきです。また繁殖に用いて以後はなるべく空胎をなくし、次から次へと妊娠、分娩せしめ、少くとも豚が最高能力を発揮する4産目までは供用すべきだと思います。このことに関連したことからについて若干述べておきます。

(1) 1年2回の生産をするには

人工乳の利用によって子豚の早期離乳がとなえられ以前は3週間離乳も行われたが、離乳後の発情再起は通常分娩後5～6週にしか起らないため、極端な早期離乳は分娩間隔の短縮にはならないわけです。又早期離乳は生理的に下痢を起しやすい欠点もありますので現在は生後35～40日離乳が一般化しています。このような離乳は人工乳を用いない60日離乳に比べて母豚の栄養がさほど低下しないため、通常離乳して1週間前後には発情が現われますので、直ちに交配が出来、受胎率もよいです。従って1年2回転が可能とな



母豚と健康そうな子豚 豚舎がいかに清潔な感じがする。
るわけです。

(2) 無発情豚の発情促進法

繁殖用として育成したものや離乳後1ヶ月経過しても発情の起らない豚は案外多いようです。このような豚の発情促進にはホルモン療法が一番よく効き、妊馬血清ホルモンの注射で良好な結果が得られます。

(3) 今後の農家養豚のあり方

畜産収入を向上させるためには今迄の繁殖豚1頭飼育ではあまり利益が上らないので、今後は飼養頭数を増やす必要があります。何頭が適当かは農業経営の規模とも関係しますので、一概にはいえませんが、一般的には繁殖豚5～6頭飼育がてごろではないかと思えます。この程度の頭数ですと管理も十分にゆきとどき子豚の損耗も殆んどないと思われれます。繁殖豚を5頭以上飼育する場合、豚房も1頭1房宛るかというのではなく、産室と群飼室と両方設けて計画的に使用した方がよいです。つまり空胎から妊娠中期にかけては群飼し、省力管理の出来るように工夫することです。ヨーロッパあたりでは産室数は種豚数の1/3程度のようなようです。5頭の場合は産室2に群飼室1ということになり、この辺にも子豚の生産コスト低減の策があるわけです。
(渡 嘉 敷 綏 宝)